れも各人專攻の領域に於ける研究であつて、原教授の序に述べられて居る如く、「京都帝國大學西洋史學徒の、學問報國に示す意義の具現」として、其の公刊が學界の內外に對して意義を持つものと信ずる次第である。

所載論文は西洋史學の諸分野並に時代に亙り極めて多彩であるが、今これを其の主題によつて大別すると、史學史或は史學思想史關係のものが最も多く、原博士の「ヘカタイオス研究」を初めとして、三嘉田熊藏氏「タキトウスの『ゲルマーニア』著作目的に關する考察」、井上智勇氏「アウグスチンの歷史觀」、鹽見高年氏「ブルクハルトに於けるルネサンス概念」、前川貞次郎氏「ミシュレ」とその『世界史序說』、評者の「トレルチに於ける歷史主義の問題」、井上肇氏「ブルクハルトに於ける連續性の理念」あり、次いで宗教史關係のものとして、村田數之亮氏「ミケーネ的『英雄崇拜』について」、岡島誠太郎氏「女神ハトールを通じて觀る埃及宗教の一考察」、水川溫二氏「中世初期に於ける聖人崇敬の變貌」、富本健輔氏「Luther; Von weltlicher Obrigkeit を讀みて」、がある。更に經濟史には、鈴木成高氏「中世商業の性質」、西井克己氏「資本主義概念再檢討の意義」、上之親夫氏「マーカンティリストの自由思想」、思想史に、中山治一氏「二つの歷史主義」、曾田雄次氏「ルネサンス君主論の一性格」、政治外交史關係のものに、豐田堯氏「一八六〇年の英佛通商條約と佛蘭西」、今津晃氏「米西戰爭とマッキンレー」がある。通觀するに、一般に思想史的精神史的問題又はそれに似た取り扱ひ方が支配的傾向たる事を示し、且つ時代別に見れば、ルネサンス以後の近代史研究が半以上を占め、そこに若き人々の近代史への關心の强さを物語るものがある。

我々は現在有史以來未曾有の大戰爭を戰つて居る。戰爭完勝の道が、單なる一局部の戰鬪に執はれざる全局面の綜合的觀察を俟つて初めて打開される事は、平凡な眞理でありながら、其の實行は決して容易ではない。我々は個人の日常生活に於いてすら、區々たる一面しか見得ない狹隘な施策が如何に有害であるかを痛感して居る。況や國家百年の大計は、爲政者の最も廣い視野と最も深い洞見とを不可缺の要件とする事、こゝに冗論するを要せぬ。國家の世界史的聯關性を忘却した近視眼的空理的獨善的な國政運營の方途が國家にとり如何に危險であるかは、世界史のあらゆる頁に其の例證が刻されて居る。かゝる意味に於いて西洋史研究は學的研究としての意義を越えて、國民各層に高邁なる眼識と透徹せる洞察力とを植え付ける好適の教材として直接國家に役立つものであり又役立たねばならぬ。研究室內の薄暗い書架の下、一見迂遠に見える孜々たる其の研究から生れる業績は、其の儘國家を動かす原動力たる可きもの、『西洋史說苑』に結晶せる京大西洋史研究室の學的成果は、學術精神に徹する事が直ちに國家に對する最大の寄與を成す事實の好き典型となるものである。（目黑書店刊行・定價五圓四拾錢）（兼岩正夫）

滿洲・支那（世界地理政治大系）　米倉二郎著

滿洲・支那を論ずることは至難の業であるが、本書はよく東洋

地理學の傳統をついで、古文獻を參照し、內外先學の地域的研究更に氏自身の個別調査を土臺として、從來の地理、歷史書に缺くるところを補ひ、而かも大東亞新秩序の今後の展開にまで論及した所の極めて示唆深き書である。

總序にあつては新秩序の展開に於いて滿洲事變の意義に重きをおき、第一部　滿洲國にては綜合立地計畫と開拓とを重視して、特に長白山地區を滿洲國有國土としてその一體的開發の要を論ずる所が目立つてゐる。第二部　支那に於いては漢族の發展と諸民族との關係、西方侵略と支那の變貌を詳細に論じ、北支那開發の章下にては治安工作上、大名附近の省界の是正、淮北の新省創設を提唱して居り、南支那にては國土構造の多元性と海洋的性格をもつことより南方圏に於ける華僑問題を論じ、海南島の地政學的位置の重要性を指摘、西南支那は蔣政權、西北支那は回教徒及共產軍との關係を主にしてその動向に言及してゐる。

かくて總結たる新秩序の地政學にては、大東亞共榮圏の構造は大陸、海洋綜合型の領域構造をとるべきものであり、そのためには重要なる陸上海上ルートの掌握はもとより、更に大陸と海洋との聯絡ルート確保の要を論じ、最後に日本民族は海洋的島嶼的性格をもち、島、沿海地の經營には經驗あるも、大東亞圏は海洋、大陸を包含するものなれば、皇國は大陸に確固たる基地をもつ要があり、滿洲開拓民政策は大東亞圏の彌榮の爲に最も恒久的基本的事業たり、更に八紘爲宇の理想は日本民族が當に開拓者的精神を堅持することによつてのみ達成される所であつて、滿洲開拓民はその先驅であり、爾餘の共榮圏地域に進出すべき日本人の以て範とすべきものであらうと論じて結びとしてゐる。論旨明確、蓋し大陸建設に資する所あるべき書とする。（昭和十九年六月・白楊社・A5版・三九五頁・定價五圓）（木村憲治）

滿洲の史蹟

村田治郎著

現時の史蹟に關する研究、乃至調査報告の類が、稍〻專門的に過ぎて、專攻者以外の者に近附き難い感じを與へてゐたのは事實である。從つて歷史に興味を持ち、史蹟に就いて知らんとする一般人士は勿論のこと、歷史學そのものゝ研究者にとつても、史蹟に關する一般的知識を得る必要に迫られながらも、平易に述べられた概說書を缺くがために現在甚だ不充分な實狀に置かれてゐる。滿洲の史蹟に就いても此の點は同樣であつて、一小地域乃至一遺跡に關する極めて詳細な調査報告書の類の發表せられたものは少くないが、時代的、地域的に全般にわたつた概說書は、「まだ一册もない」と斷言せねばならぬ實狀にある。本書は序文に述べられてゐる如く、著者が第一の目的として、此の全體的展望を專門外の人々に與へることにあるのであつて、併せて現在愈〻興隆に赴きつゝある滿洲國の建國十周年を祝福する意に出でたものである。かくて右の意圖に副ふべく、本書には一百に上る多數の圖版と六十の插圖とを加へ、專門的な術語は出來る限り避けて平易な口語文を以て述べられてゐるが、別に各節の終りには研究文獻の紹介を以てし、また卷末には詳細な索引、史蹟地圖を加へて著者